

JSPS科学研究費報告書 (23520227)

基盤研究 (C) 平成23～25年度 (二〇二一～二〇二三年度)

広島的女性作家・岡田 (永代) 美知代に関する総合的研究

研究代表者 有元伸子

研究分担者 遠藤伸治

瀬崎圭二

## 目次

岡田（永代）美知代 研究報告	有元伸子	1
明治四〇年代の「女流作家」論と岡田（永代）美知代	瀬崎圭二	10
共同研究報告	遠藤伸治	15
〔付録1〕 岡田（永代）美知代著作リスト	有元伸子	17
〔付録2〕 本研究についての報道	.....	23

## 岡田（永代）美知代 研究報告

有元 伸子

岡田（永代）美知代は、広島県甲奴郡上下町（現・府中市上下町）出身の女性作家である。明治末から大正期にかけて、小説や翻訳を執筆したほか、少女小説も多く手がけている。著書に、花にまつわる古今東西の挿話を編集した短編集『花ものがたり』（一九一七年（大正六））や、ストウ夫人の「アングル・トムズ・ケビン」の早い時期の翻訳『奴隷トム』（一九二三年（大正一二）、成文堂）などがある

しかしながら、不幸にも、岡田美知代の名前は、当初から彼女自身の仕事とは異なつた面から記憶されてきた。すなわち、田山花袋の小説「蒲団」の女主人公・横山芳子のモデルとしてである。花袋は、美知代をモデルとして、「蒲団」のほか、「妻」のてる子、「縁」の敏子などを造型したが、これら花袋作品が美知代のスキャンダラスなイメージを形成し、彼女の生や作品を規定するコードとなつてしまった。客観的な事実を書くものだと一般に信じられた「自然主義作家」花袋によって塗り込められた美知代像は広く伝播し、その呪縛はなかなか解けることがない。

広島県内にあつても美知代の存在はほとんど知られていない。作品を

手近に読む機会もなく、花袋研究の文脈で触れられるばかりで、彼女自身の研究は乏しい。しかしながら、書くことにこだわり、『青鞥』同人たちとは重なりつつも異なつた文脈で「新しい女」として生きようとした生身の美知代の姿は興味深く、残した作品も多様で意外な深度を持っている。もっと享受されてもよい作家なのではないか。師であつた田山花袋との関係や感情も複雑かつアンヴィバレントで、もう少し丁寧にジェンダーの視点から美知代に寄り添いつつ捉え直すべきであろう。こうした研究の前提として、まずは著作リストと伝記的事項の解明を行なうべきである。本科研「広島的女性作家・岡田（永代）美知代に関する総合的研究」（研究課題番号 23520227）は、二〇一一年度（平成二三）～一三年度（平成二五）に、このような現状認識から出発した。

近年、岡田（永代）美知代を再評価する気運は高まっている。『新編 日本文学全集』第三卷（善柿堂、二〇一一年）には美知代の二作品（「ある女の手紙」「二銭銅貨」）が収録され、一般読者が美知代作品に触れる機会が増加した。また、美知代の生家は上下町が取得して改修し、二〇

○三年（平成一五）に上下町歴史文化資料館として開館（現在は、府中市上下歴史文化資料館）。美知代の未発表原稿などの資料を収集・展示し、企画展を開催するほか、花袋が上下町を訪ねた折に宿泊した部屋や札状も保存公開されるなど、文学者・岡田美知代とその文学の普及を図っている。資料館と連携協力して、書誌事項が不明の作品調査を行い、美知代の生前未発表原稿の翻刻などを通じて、成果を広く還元することも、本研究の目的の一つであった。

以下、岡田（永代）美知代の生と創作を概括した後に、本科研による成果の概要を報告したい。

## 一 岡田（永代）美知代の生と創作

岡田美知代は、一八八五年（明治一八）四月一〇日（一八日説も）、広島県甲奴郡上下村（現・府中市上下町）に生れた。岡田家は、田畑山林を多く所有する豪家であり、金融業も営んでいた。父・胖十郎は、備後銀行の創設者の一人であり、後年には県会議員や上下町長を務めるなど町の名士で、一八九七年（明治三〇）、町制施行により上下町が誕生した時点で、町内第四位の多額納税者であった。母・ミナは同志社女学校を出ており、夫婦ともども熱心なクリスチャンで、一八九六年（明治二九）、上下町にキリスト教講義所を作り、その廃止後も町内の伝道に尽力した。

美知代は五人兄弟の長女（長兄・実麿、次兄・束稲、弟・三米、妹・万寿代）である。長兄の実麿は、アメリカ留学後、神戸高等商業学校や第一高等学校（夏目漱石の後任）の教授となった著名な英語学者であり、後年には、上下町の実家と花袋、美知代、永代静雄との間に入って調停も行った。

美知代は、上下小学校卒業後、一八九八年（明治三一）神戸女学院に入学、十七歳になると神戸教会で洗礼を受けた。一九〇三年（明治三六）、本科三年次に田山花袋に書簡を出して入門を懇願。数度の書簡往復のあと、入門が許された。翌年二月に神戸女学院を中退し、父・胖十郎に付き添われて上京。はじめは牛込区若松町の花袋宅に寄宿し、その後、花袋の妻りさ（里さ・利佐子）の姉・浅井かくの家（麴町区土手三番町）に転居して、津田英学塾予科に通学した。当時、花袋は博文館に勤務しており、一九〇四年（明治三七）三月から九月まで日露戦争に記者として広島島の宇品港から従軍して留守であった。この間も美知代との間に文通を行なっている。

一九〇五年（明治三八）春から体調不良で一時帰省していた美知代は、八月、神戸教会の夏期学校において、かねて見知っていた同志社神学部の学生・永代静雄ながよと親しくなる。九月の上京の途次、京都で落ち合った永代と膳所を遊覧したが、これが花袋と実家に発覚。永代も上京したため、花袋は美知代を義姉の家から自宅に戻し、父・胖十郎と善後策を相

談した。翌一九〇六年（明治三九）一月八日、美知代は上京した父親に連れられて上下町に帰郷。郷里では『文章世界』『新声』『文藝倶楽部』『新潮』『実業之横浜』といった雑誌に積極的に投稿する。美知代と静雄の恋愛についても、花袋の「蒲団」に先行して美知代自身が作品化しており、花袋もそれに目を通していた。

美知代が帰郷した年の一〇月、山陰旅行の途上の花袋が上下町の岡田家に二日滞在して一家から歓待を受けた。この体験は、後年「備後の山中」で叙情的に回想されることになる（『日本一周』中編、一九一五年（大正四））。翌一九〇七年（明治四〇）九月、花袋が自身と美知代・静雄をモデルにして「蒲団」を発表、女弟子への片思いと性欲を描いた内容が大きな反響をよびおこす。ゴシップの渦中におかれた美知代は、手記を発表するかたわら、創作と投稿を続けた。『女子文壇』一九〇八年（明治四一）四月臨時増刊号「文壇の花」特集では、短篇小説「侮辱」で天賞を受賞し、巻頭に肖像写真も掲載されている。

一九〇八年（明治四一）四月、美知代は二年三カ月ぶりに再上京して、白山御殿町の兄・実厩宅に住み、永代静雄と再会。静雄は同年二月から、須磨子の名で『少女の友』にルイス・キャロル『不思議の国のアリス』の翻訳「アリス物語」を連載中であった（翌年三月）。同年九月、美知代は妊娠を知って九十九里に隠れ住む。一二月には牛込区原町で永代と同居。これを知った美知代の実家は激怒し、翌一九〇九年（明治四二）、

美知代は戸籍上、形式的に田山花袋の養女となり、永代静雄と結婚披露の通知状を出す。永代は『旅行新聞』『東京毎夕新聞』から、春ごろ『中央新聞』に移籍。三月二〇日には長女・千鶴子が生れた。この年の五月以降、美知代は筆名を「岡田美知代」から「永代美知代」と改めている。美知代は、静雄の勤務する『中央新聞』に少女小説と、無署名ながら美知代作と推定される連載小説を二編執筆していた。一月には永代と別れて、千鶴子を連れて田山家に戻り、四月から花袋の内弟子となっていた水野仙子（服部貞子）と代々木初台の家で共同生活を始める。

一九一〇年（明治四三）、長女・千鶴子を、花袋の妻りさの兄・太田玉茗の養女として入籍。千鶴子と水野仙子とともに、二月に仙子の故郷福島県の飯坂温泉で一カ月暮らし、三月に太田玉茗が就職をつとめる建福寺（埼玉県羽生）に一カ月滞在して千鶴子を慣らしたあと、千鶴子を置いて東京に戻った。四月二〇日、仙子と暮らす代々木初台の家を出て、永代と復縁した。このあたりの経緯は、花袋の「縁」（『毎日電報』一九一〇年三月〜八月）や、この記述に反論・対抗する形で書かれた美知代自身の「ある女の手紙」（『スバル』一九一〇年九月）・「里子」（『スバル』一九一〇年一〇月）・「岡澤の家」（『ホトトギス』一九一〇年一二月）、あるいは水野仙子「氷柱」（『新小説』一九一三年三月）などに文学化された。

一九一〇年（明治四三）、『富山日報』の記者となった永代と共に富

山に移り、富山市三王町三三番地に住まう（永代静雄「入社の際」は『富山日報』明治四三年六月六日）。美知代は、『中央新聞』に続き、『富山日報』にも、少女小説や記事を掲載している。翌一九一一年（明治四四）三月五日、長男・太刀男が誕生。静雄は四月に創刊された大阪の『帝國新聞』に入社するも、同年六月三〇日、養女に出した千鶴子が、脳膜炎のために二歳で死去。七月、傷心をいやすために、永代とともに大分県別府で療養して、一二月に上京した。同年初夏に、平塚らいてうが『青鞥』創刊に際して生田長江の勧めにしたがい年長の女性作家たちに賛助員を依頼した。美知代にも依頼状が送られたが、居所不定の時期で届かず、付箋付きで返送された。らいてうは、『そんなわけで永代さんと「青鞥」とはついに無縁でおわかりました』と記している（平塚らいてう『元始、女性は太陽であった―平塚らいてう自伝』上巻、大月書店、一九七一年）。

一九一二年（明治四五〓大正元）、永代静雄は、秋に『東京毎夕新聞』に入社し、二月には「不思議の国のアリス」の翻訳書『アリス物語』（紅葉堂書店）を刊行した。一九一七年（大正六）二月に田山家と協議離縁して上下町の岡田胖十郎の戸籍に復籍し、翌三月に永代の戸籍に入籍している。永代は、毎夕新聞社の社会部長、編集局長にまで昇進したが、一九一九年（大正八）、毎夕新聞社を退社して、新聞研究所を設立した。美知代は、最初に子どもが誕生した一九〇九年（明治四二）から少女

小説を書き始め、大正期に入ると、『少女世界』『少女の友』『ニコニコ』『家庭パック』『少年倶楽部』などの雑誌に少女小説・童話・歴史小説や軽い読み物を量産した。『花ものがたり』『奴隷トム』『愛と真実』などの創作集や翻訳書の刊行も大正期のことである。

一九二六年（大正一五）、永代静雄と別れ、『主婦の友』特派記者として太刀男を連れてアメリカに渡り、カリフォルニアで成功をおさめた従姉妹の福井千恵と親しくした。永代との離縁や渡米の動機については、性格の不一致や、生活苦、永代の深酒に嫌気がさして禁酒国アメリカに向かったなどの諸説があるが、はっきりしない。渡米の翌年、結核にかかった太刀男が単身帰国して、父の永代に引き取られる。永代は、その年に大河内ひでと再婚。美知代も、アメリカで知り合った佐賀県出身の花田小太郎と再婚した。

太平洋戦争が始まる直前の一九四一年（昭和一六）三月、花田とともに帰国。すでに、師・田山花袋は一九三〇年（昭和五）五月、喉頭ガンのために死去しており、長男・太刀男も一九三二年（昭和七）五月、数年二十二歳の若さで亡くなっていた。美知代夫妻は、帰国当座は親族の一人・岡田六一を頼って広島市に暮らしたが、翌一九四二（昭和一七）、亡くなった妹・万寿代の嫁ぎ先である八谷正義の家（広島県庄原市川北町）に移った。八谷正義は、東北帝国大学農学部出身で、欧米に留学後、台北帝国大学や北海道帝国大学で教え、戦後は長く庄原市長を務め

た人物である。翌年、美知代夫妻は、同じ庄原市川北町大神宮境内にある八谷家の別邸に移居、ここが終の住処となる。一九四四（昭和一九）、前夫・永代静雄が死去し、美知代は永代の戸籍から除籍した。一九五七年（昭和三二）一月七日、夫の花田小太郎が死去。

一九五八年（昭和三三）には、「花袋の「蒲団」と私」（『婦人朝日』、七月一日）、「私は「蒲団」のモデルだった」（『みどり』、一〇月）の二つの手記を発表（いずれも「永代美知代」名）。ほかに、「国木田独歩のおのぶさん」ほか数点の未発表原稿を執筆している。帰国後も日課として英語の勉強を続けた。晩年の美知代と親しくした原博巳が美知代から英語を習い始めたのは、この頃からであった。一九六八年（昭和四三）一月一九日、老衰のため八十二歳で死去。

## 二 研究報告

本研究は、広島県出身の女性作家・岡田（永代）美知代（一八八五―一九六八）について、田山花袋の「蒲団」のモデルとしてのフィリターを排して、一人の女性作家として総合的に評価し直すことを目的とし、著作リストや年譜の作成と、作品の総合的な評価を行うものであった。

美知代の著作の全貌が未解明のため、すべての研究の基礎となる著作リスト作成を最優先に進めたが、その結果、これまで一〇〇作品弱しか

知られていなかった美知代の著作が、二〇〇作以上あることが判明した。調査の過程では、はじめに美知代の生家を改築して開館した府中市上下歴史文化資料館所蔵の著作コピーの書誌事項の確認を行った。さらに、大学院生の補助を得て、国立国会図書館、日本近代文学館、東京大学明治新聞雑誌文庫、お茶の水図書館、日本新聞博物館、大阪府立国際児童文学館等において、新聞・文芸雑誌・少年少女雑誌の索引・目次・本文の調査を行った。これらを整理して著作リストを作成し、刊行した。最新の著作リストは、本報告書の末尾に付録として掲載している。

- ・ 著書……単著5冊（うち翻訳2冊）、共著1冊
- ・ 雑誌新聞掲載作品……216作

（他に投稿の事実が判明しているもの7作品）

- ・ 生前未発表原稿……11作

このリストは、美知代研究のみならず、明治・大正期の女性作家研究や少女小説研究、さらに田山花袋研究にも寄与する基礎的な資料として、大いに活用できるものである。論者自身も、花袋の「蒲団」や以降の美知代に関連する作品と美知代の書き物との関係を考察して、従来の「蒲団」の成立過程とは異なる見解を示した。

また、生前未発表原稿の一つ「国木田独歩のおのぶさん」の翻刻と解説も刊行した。翻刻に際しては、晩年の美知代と親しかった原博巳氏への聞き取りと美知代が在籍していた神戸女学院での調査も行い、国木田

独歩の最初の妻・佐々城信子（有島武郎『或る女』のモデル）が神戸女学院に在籍していたこと等が明らかになった。これも研究上の成果である。また、『中央新聞』に掲載された無署名の連載小説を美知代作だと推定して、紹介・解説を行なった。

研究分担者と共に上下歴史文化資料館を複数回訪問して、美知代の文的背景と地域性の核心を探るとともに、美知代の著作権継承者である親族の方々や、吉川豊子氏など関連する研究者との交流もはかった。本研究の成果は上下歴史文化資料館の展示等に反映され、開館一〇周年記念講座の担当などを通じて、地域に還元してきた。群馬県館林市の田山花袋記念文学館でも美知代の花袋宛て書簡等の調査を行った。

なお、研究分担者のうち、瀬崎圭二は美知代を取り巻く言論状況を調査し、遠藤伸治は美知代の作品群と花袋との関係の分析を行った。瀬崎の成果は本報告書に掲載されている。遠藤の成果は他誌に掲載予定であり、本報告書にはその概要が収録されている。

以下は、研究代表者・有元伸子の研究成果一覧である。研究論文には要旨を付した。

#### 〔A 研究論文（有元伸子）〕

### ① 「広島的女性作家・岡田（永代）美知代研究（1）―研究の現状と課題」

#### （『内海文化研究紀要』三九、二〇一二年三月）

研究の初発として、岡田（永代）美知代研究の現状と課題についてまとめた。はじめに美知代の生涯を概括した。その後、美知代研究の必要性と可能性について、①田山花袋との関係の再評価 ②女性職業作家成立の過程を検討する先行研究との接続による同時期の女性作家同士の関係解明から論じた。また、田山花袋研究や永代静雄研究において美知代に関して指摘している重要な先行研究を紹介した。最後に美知代テキストの読解の可能性についても触れて、今後の研究の指針を示した。

### ② 「広島的女性作家・岡田（永代）美知代研究（2）―著作の概要」

#### （『広島大学大学院文学研究科論集』七一、二〇一二年二月）

作家の著作リストは文学研究を行なうために必須であるが、これまで岡田（永代）美知代に関して全体を網羅するものはなく、まとめたものとしては本稿におけるものが初めてである。上下歴史文化資料館編の『岡田（永代）美知代作品集』全三巻の書誌事項の探索から出発し、他に美知代作品掲載の可能性がある新聞雑誌を調査することによって新たに判明したものを加えた。併せて、掲載メディア（新聞雑誌）別の作品数と発表期間のグラフも示した。



③ 「資料翻刻」 永代美知代「国木田独歩のおのぶさん」

『内海文化研究紀要』四〇、二〇二二年三月

永代美知代の生前未発表小説「国木田独歩のおのぶさん」（推定・一九五八年執筆）を翻刻し、解説を付した。美知代は、師の友人である国木田独歩を生涯敬愛しており、自身が見聞した独歩の最初の妻・佐々城信子（有島武郎『或る女』早月葉子のモデル）と独歩について小説化した。解説では、信子についての美知代の視線は、一見ミソジニーだが実はシスターフードなものであること、昭和三〇年代に美知代が信子と独歩の関係を回想した意味を考察した。なお、佐々城信子が明治三一年九月〜一二月に神戸女学院に在学し、美知代が信子に会っていた事実は、本稿によって初めて明らかになった。

※飯田祐子（神戸女学院大学）に本稿を紹介いただいた。

↓『蒲団』の岡田美知代と『或る女』の佐々城信子―神戸女学院での出会い』『神戸女学院大学学報』一六六、一〇頁、二〇二二年二月一日

④ 「地域性」をめぐる攻防―岡田（永代）美知代と田山花袋の描くロー

カリテイ』（『近代文学試論』五〇、二〇二二年二月）

田山花袋「蒲団」備後の山中に描かれた女弟子の故郷の表象と、女弟子のモデルとされる岡田（永代）美知代の抗議を検討し、男女

の師弟によるローカリテイ表象をめぐる攻防の様相を、言語（方言・共通語・英語）の観点により検討した。また、美知代の少女小説「国なまり」を例に、美知代にとってジェンダーより階層が優位に認識されていること、花袋と美知代のテクストに〈西洋／日本・東京／地方・辺境〉といった構図が底流しており、西洋中心主義と近代的な上昇志向という点で両者は一致することを示した。

⑤ 「資料紹介」『中央新聞』掲載の推定・永代美知代作品「老嬢の告白」

―付 岡田（永代）美知代著作リスト

『内海文化研究紀要』四一、二〇二三年三月

『中央新聞』掲載の無署名の連載小説が永代美知代による執筆であることを推定し、内容を紹介するとともに、解説を付した。「老嬢」オールドミスのモチーフが同時代の島崎藤村らの小説に影響されるものであると同時に美知代自身の生と深く交錯するものであること、また女性同性愛のモチーフについても指摘し、小説「老嬢の告白」が女性の生と性を描くエンタテイメント小説であると評価した。

さらに、A―②以降に新たに判明した作品を加えた美知代の著作リストを、付録として付した。

※著作権継承者の許諾を得て、『中央新聞』掲載の推定・永代美知代作品「老嬢の告白」「少女写生 休暇後」「女子大学英文科出

身 新夫人の打明話」の全文を、右記リンクの広島大学学術情報  
リポジトリ (H i R) においてPDFにより公開している。

⑥ 「作者」をめぐる攻防―田山花袋「蒲団」と岡田美知代の小説」

『日本近代文学』八八、二〇一三年五月)

これまで顧みられることのなかった永代姓以前の岡田美知代時代の作品と美知代・花袋間の往復書簡を検討し、「蒲団」発表前後に男  
師匠と女弟子との間で繰り広げられた、一つの恋愛事件の〈作者〉  
の座をめぐる攻防の様相を明らかにした。恋愛事件によって帰郷さ  
せられて以降、美知代は花袋の手紙をも取り込みつつ、自らの恋愛  
を何度も小説化する。だが、花袋は美知代作品を「主観的」だと批  
判して恋愛事件の執筆を禁じた上で、彼自身が女弟子の恋愛事件を  
「蒲団」に結実させた。「蒲団」は、美知代の作品を篡奪し、女弟子  
が〈書く女〉であることを周到に隠蔽して成立したテクスチュアル・  
ハラズメントの側面をもつ小説なのである。

⑦ 「永代美知代の少女小説にみる〈労働〉」

『内海文化研究紀要』四二、二〇一四年三月)

永代美知代による一九一〇年代の少女小説から、〈労働〉表象を検  
討した。美知代の少女小説において、少女にとっての憧れの職業は、

女学校や女子大学の教師や作家などの形をとることが多い。美知代  
にとっては、ジェンダーよりも階層の方が上位に設定されており、  
女性であっても才能と環境に恵まれていれば少年と同じ「成功」を  
希求できるとされる。一方、当時の少女小説のトレンドであった少  
女不幸物語も書いており、そこでは自らの分をわきまえて充足感を  
得るか、ごくまれに勤勉や正直などの長所によって救済されるとい  
った展開をとる。少女が理想的な成功を得るためには環境（恵まれ  
た階層）が必要であることが示されるのである。

〔B 口頭発表・講演(有元伸子)〕

① 「作者」をめぐる攻防―田山花袋「蒲団」と岡田美知代の小説」

(広島大学国語国文学会平成二四年度研究集会、二〇一二年七月八日、  
広島大学)

② 「広島的女性作家・岡田(永代)美知代研究の可能性」

(サバティカル研修報告会・文学研究科FD、二〇一三年六月一七日、  
広島大学文学研究科)

③ 「岡田美知代とその作品について」

(上下歴史文化資料館開館十周年記念講座、二〇一三年一〇月二三日、  
府中市上下歴史文化資料館)

④ 「女性作家の「労働」表現―地域からの発信― 岡田美知代」

(富山大学人文学部シンポジウム、二〇一三年一月二八日、

富山大学人文学部)

- ⑤ 「特集 女性作家の「労働」に関する1910年代の文学表象 岡田美知代を事例に」

(日本近代文学会北陸支部大会、二〇一三年一月三〇日、

富山県高岡市 ホテル磯はなび)

### 三 今後の課題

美知代の伝記のうち、従来十分に知られていない上京以前や大正期以降、戦後の時期に関して、府中市上下歴史文化資料館所蔵の資料検討や、上下町・庄原市において親族や関係者へのインタビュー実施によってさらに明らかにしていきたい。

新聞雑誌調査を継続して行い、すべての研究の基礎となる著作リストを今後も整備したうえで、作品を収集・分析し、評価を行なう必要がある。美知代の一般小説、少女小説のいずれに関しても研究は未開拓であり、種々の観点からの分析が可能である。女学生・恋愛・性・家事労働・地域性など、美知代が描くモチーフは多い。田山花袋との関係についても、花袋「縁」に描かれた時期についての直接交流の様相の解明のほか、遠藤伸治が指摘するような資質の差など、両者の小説の質の比較がさら

に求められる。

明治末から大正期にかけての女性職業作家の成立過程の観点からも、美知代の小説と存在は興味深い。瀬崎が指摘するような、同時代の男性評者たちの女性作家に向けるまなざしと、そうした環境のなかで女性作家がどのように書くことを選びとっていったのか。さらに、今日に至るまで、美知代の存在と作品とがどのように捉えられてきたのかも検討していきたい。分析の対象は評論や研究論文ばかりではなく、たとえば、漫画『松岡國男妖怪退治』(大塚英志原作/山崎峰水画、二〇一一〜一四年)に描かれる美知代像なども加えることができよう。

府中市上下歴史文化資料館・田山花袋記念文学館所蔵の美知代の生前未発表資料のさらなる翻刻紹介も課題の一つである。また、美知代の作品を読みたいという要望も届いている。著作権継承者の意向を尊重し著作権に留意しながら、紙媒体やインターネット上での美知代作品の公開の可能性を探り、研究者や一般読者が美知代作品を読むことのできる環境を整えていきたいと考えている。

(ありもと のぶこ、広島大学文学研究科)

## 明治四〇年代の「女流作家」論と岡田（永代）美知代

瀬崎 圭二

明治三七年二月、田山花袋に弟子入りを許された岡田美知代は上京して花袋のもとで文学修業に励むが、明治三九年一月に永代静雄との関係が発覚したため故郷の広島県甲奴郡上下町に帰郷する。花袋の斡旋があったのか、上下町に一旦帰郷した頃から美知代は『新声』や『新潮』などの文芸誌にも作品を掲載するようになる。美知代をモデルとした花袋の「蒲団」（『新小説』明治四〇年九月）が発表され、美知代が明治四一年四月に再び上京した頃、『新潮』（明治四一年五月一日）誌上に小栗風葉、柳川春葉、徳田秋江、生田長江、真山青果による「室中偶話」として「女流作家論」なる記事が掲載されている。

この記事は、「己を忘れたる女流作家」、「其大成せざる所以」、「女流作家を罵る」、「曰く、気取るな」の四項目で展開されており、当時活動していた「女流作家」を痛烈に批判している。「女流作家を罵る」は二名による談話形式なので、おそらくそれぞれの項目毎に前記の五名が分担して執筆、発言したものをまとめて「女流作家論」として掲載したのであろう。ただしこの記事は、その五名による記述、もしくは発言であるこ

とは確かなのだが、誰がどの項目の記述、発言をしたのかが定かではない。この記事は、そのような匿名性を保ちながら、「女流作家」に対する罵詈雑言にも近い批判を繰り広げているのである。

中でも、「女流作家を罵る」という二人の談話記事の批判は以下の通り強烈だ。

▲女は猿を脱しない。模倣性に富んで居る。小説を書いても人の真似よりか書けない。

○然う。僕も云ふ。大塚楠緒子、長谷川しぐれ女史などは、殊に人真似が甚だしい。鏡花が流行れば鏡花を真似る。漱石が流行れば直ぐ漱石を真似る。

（中略）

○女には独創的などころがない。小説を書いても然うだ。総て模倣だ。猿は人間より模倣が強い。女は模倣的のものをやるが好い。なまなか女が特に独創的な頭を要する小説を書くなどは僭越だ。音楽とか、芝居のやうな人の真似で済む事をやつて居ればそれで相当

なのだ。

(中略)

○引くるめて女流作家の作物は、一葉女史を除いて、只、男の模倣や、巧みにこね合してあるのみで、何等人生に触れた物はない。

女性作家の作物は男性作家の模倣に過ぎないという認識や、樋口一葉だけを例外的に評価する文学観は他の項目でも共有されているため、前記五名の認識に大きなズレはないようだ。この記事が発表された明治四一年当時、徳田秋江、生田長江、真山青果に文学的実績はそれほどないものの、尾崎紅葉の門下生として実績を積み重ねてきた小栗風葉や柳川春葉の批判の意味は、文壇の趨勢が自然主義に移行しつつあったとは言え、小さくはないだろう。それは、主要新聞各紙の記者たちの意見をもとに相撲の番付に擬して編集された「蒙御免日本文士階級鑑」(『文芸新聞』明治四〇年三月一日)において、風葉が「大小説家」の前頭六枚目、春葉が同一〇枚目の位置にあることからもうかがい知れよう。そして、前掲したような「女流作家」に対する認識が、この五名のみならず、文壇全体である程度共有されたものであったとするならば、花袋に師事し、その模倣を強いられた美知代の作家としての自立は、多くの困難に囲繞されていたことになるだろう。

明治四一年四月の再上京後、妊娠した美知代は、翌年一月に花袋の養女となる形で永代静雄と結婚、三月に長女千鶴子を出産し、この頃から

筆名を「永代美知代」に変更している。美知代は、明治四三年に発表された花袋の「縁」(『毎日電報』明治四三年三〇八月)に対して、「ある女の手紙」(『スバル』明治四三年九月)、「里子」(『スバル』明治四三年一〇月)を発表し、『中央公論』(明治四三年一二月)にも「女流作家小説拾篇」の一作として「一銭銅貨」を掲載した。この頃、前出の徳田秋江が「当今の女流作家」(『文章世界』明治四三年一月一五日)という記事を発表している。

この記事の筆致は随分穏やかで、前掲した『新潮』のそのように「女流作家」に対する痛烈な批判や罵詈雑言に満ちていないわけではない。秋江は、この記事の中で取り上げた小金井喜美子と大塚楠緒子に対して、「女子が糊口の為でなく、ほんの筆すさびに小説いぢりをしてられるのは、あの人達も、まあ幸福な境涯と言はねばなるまい」と皮肉りながらも、「近代写実小説に筆を染めた明治の女流作家の名簿に最初に名を觀せらるべき人」として評価している。また、岡田八千代も「十五六年前に一時栄えて、暫時中絶した時代の女流文学の命脈を僅かに繋いで来た重なる代表者」として位置づけている。その上で、秋江は、大塚楠緒子や岡田八千代の限界と「女流文学」の状況を以下のように分析している。

要するに大塚楠緒子も岡田八千代も小説に女性の真を示すまでに至らなかつた。或は、斯う言つたら好いかも知れぬ。彼等は、題材

を情化する態度に於て女性ではなかった。一葉女史によつて社会のある面の女性の真を聞かされた私は、両女史をば、寂れて寂れた女流文壇の珍と思つたから、「早稲田文学」を編輯してゐた時分に、特に二人に頼んで書いて貰つたことも数度あつた。斯様なことを言ふのは何うでも可いやうなものゝ、私は女流文学にも可なり注意を払つてゐた。けれども両女史は遂に女性を語らなつた。

大塚楠緒子と岡田八千代に対する秋江の批判は、二人の扱う題材が「男子の題材である」ことや、女性自身の内面を語っていないところに向けられている。一方、一葉は女性の扱うべき題材を女性の視点から描けていたというのだ。ここには、あの女性の模倣性をめぐる認識と、一葉を例外的に評価する「女流文学」史観が働いていると言えよう。さらに秋江は、尾島菊子、水野仙子、野上弥生子、森しげに触れ、小金井喜美子の作品を詳細に解説した上で次のように述べている。

兎に角に、きみ子の作は之れを数年来の楠緒子、八千代の作に比べて女子らしきといふ点に於て優れてゐる。尤も之れは強ち作風の傾向の変遷といふよりも、寧ろ作家その人の個性と見た方が穩当かも知れぬ。何れにしてもきみ子が新に写実文学に筆を染めて、女性の立場にあつて女性らしき態度を以て題材を取扱つてゐるのは好い。

▲最近また、一層直接に、女性の立場から、女性問題を取扱つてゐる作家が出た。それは「スバル」に「ある女の手紙」と「里子」と

を書いた永代美知代と、「ホト、ギス」に「をんな」を書いた一宮滝子とである。

「ある女の手紙」と「里子」を発表した美知代は、男性作家を模倣する女性作家というあの認識を逸脱し、「女性の立場から、女性問題を取扱つてゐる作家」として、秋江のこの評論の中に位置づけられている。残念ながら、美知代は「筆力はある」と評価されながらも、秋江の関心が一宮滝子の「をんな」(『ホトトギス』明治四三年九月)にあつたために、それ以上言及されてはいない。ちなみに、一宮滝子の本名は木内錠子で、平塚らいてうが明治四四年九月に創刊した『青鞥』の発起人として知られる。「をんな」を掲載した『ホトトギス』は発禁処分となつたために、秋江の関心を引いたのだろう。

前に取り上げた『新潮』誌上の「女流作家論」は、確かに女性という属性に対する罵詈雑言に満ちてはいるのだが、らいてうに『青鞥』創刊を勧めたのが生田長江であつたという事実や、「当今の女流作家」における秋江の論の立て方を考慮すると、大塚楠緒子や長谷川時雨、岡田八千代の表現は、当時の男性たちの評価軸に適っていなかつたという側面もあるのだろう。当時の文壇の趨勢である自然主義的なイデオロギーを女性表現にも求め、「一層直接に、女性の立場から、女性問題を取扱つて」、「女性の真を示す」表現こそが、文学場において認識可能なレベルの(前衛)にあつたのである。秋江が美知代の「ある女の手紙」や「里

子」を評価したのは、美知代の表現がそうした評価軸に呼应していたことを示しているのだ。

明治四四年三月、美知代は長男太刀男を出産するが、六月には長女千鶴子を二歳で失っている。翌月、美知代は静雄と共に大分の別府に向かい、そこでしばらく療養した後、一二月にまた上京した。ちょうどその頃発表されたのが、鉄拳禅なる人物による「閨秀小説家論」(『新公論』明治四四年一二月)である。この評者の認識も、相変わらず一葉を絶対視する「女流文学」史観に支えられているのだが、論中で美知代に触れ、以下のようにその人物像を評している。

◎作家としてよりも、花袋が『蒲団』のモデルとして聞えたるは、『一錢銅貨』の美知代也。彼女の本姓は岡田、神戸女子学院の出にして、山出しには珍しく一種の魔力を有する女たる也。

◎失恋小説の花袋に一転機を与へ、今日の新生面を開拓せしめたるは。彼女の魔力也。彼女は『縁』に於て躍動せること、『自叙伝』によりて七掛の下落を示せる、あの女(明子)の比に非ず。書中『少しく赤くなつた顔と例の生々した表情に富んだ眼』と云ひ、『最後の一杯に茶をかけて食ふのが敏子(彼女)の習慣になつて居た』と云ふ。写し得て、面目躍如。

◎彼女は斯の如くして、天に喧伝せられたる女也。吾人は其の作家として成功するや否やを知らざるも、『縁』を読み、明治の小説を知

るに於て、多大の興味を感じずんば非ず。

おそらく鉄拳禅なる評者は、花袋の「縁」の作中人物敏子に美知代を見ていたのであろうし、評者が美知代に感じ取っている「魔力」も、美知代のものというよりは、「縁」の語りの効果から生まれたものである。美知代が、花袋の創作活動に一転機を与えた「蒲団」や「縁」のモデルとしてのみ理解されているという意味では、この記述もまた美知代を好奇の目で捉えているわけで、美知代の作品の内容には触れようとしてもいない。

とは言え、この評者の「あの女(明子)の比に非ず」という認識は特異だ。「あの女(明子)」とは、評者が引用部より前で触れている平塚らいてうのことで、「縁」の敏子から透かし見える美知代の「魔力」が、森田草平との煤煙事件で取り沙汰されたらいてうの比ではないのである。この「閨秀小説家論」が発表されたとき、既にらいてうの『青鞥』は創刊されているにも関わらず、そのような捉え方をしているのだ。

前述の通り、この評者は、草平の「煤煙」(『東京朝日新聞』明治四二年一〜五月)やその続編「自叙伝」(『東京朝日新聞』明治四四年四〜七月)の語りから透かし見えるらいてうと、「縁」の語りから透かし見える美知代を比較しているらしいので、結局はそれぞれの小説が女性を語るときの効果がもたらした差異のことを述べているに過ぎないが、この評からは、男性たちにこのような形で「語られた女性」たちが、当時の男

性中心主義的な文壇の中にある違和感をもたらしていたことがうかがえる。「魔力」という語には、その言語化され得ない、男性たちを脅かすようなある違和感も内包されていると言えよう。

さて、ここに明治四〇年代に発表された三つの「女流文学」論を取り上げてみたが、その論調は岡田（永代）美知代の活動と決して無関係ではない。例えば、美知代の「ある女の手紙」や「里子」は、花袋の「縁」に対抗する記述として捉えられるケースが多いが、それは、当時の男性中心主義的な文壇が求めた表現とも微妙に呼応している。男性たちに「魔力」と呼ばれるような主体性を持ち、男性作家の模倣ではなく、女性の立場から女性問題を扱ったような表現が、当時の新人女性作家たちに求められていたのである。

しかし、それは、皮肉にも女性たちによる自然主義の模倣によって可能になるような表現であり、秋江たちは、大塚楠緒子や岡田八千代が扱う題材を「男子の題材である」としてその模倣性を批判しながら、自然主義の模倣をよくする新人女性作家たちを評価しているに過ぎないのである。言い換えれば、女性たちによる自然主義の模倣、あるいは内面化によってこそ「一層直接に、女性の立場から、女性問題を取扱って」、「女性の真を示す」表現は可能になったのである。そこに待ち受けているのは、男性作家たちがリードする文芸思潮の模倣を批判されながらも、その模倣の中に現出する表現の中にしか女性性が認められないという女性

作家たちの袋小路である。

そうした袋小路そのものから脱しようとしたのが、平塚らいてうや『青鞥』の活動であったことは言うまでもないが、そのことよりも、ここでは、美知代の表現がその袋小路の中で生まれていることを改めて確認しておきたい。その上で、美知代が徐々に文芸誌での執筆機会を失い、やがて批評の対象にすらならなくなった原因を、前述したような文学場と個人の表現をめぐるメカニズムの点から巨視的に捉えておく必要がある。そうした作業が、〈広島〉の〈女性作家〉としての美知代研究に次いで展開されるべきなのである。

**付記** 岡田（永代）美知代の経歴や著作の情報については、有元伸子「広島的女性作家・岡田（永代）美知代研究（1）——研究の現状と課題——」（『内海文化研究紀要』二〇一一年三月）、同「広島的女性作家・岡田（永代）美知代研究（2）——著作の概要——」（『広島大学院文学研究科論集』二〇一一年一二月）を参照した。

（せざき けいじ、広島大学文学研究科）



## 共同研究報告

遠藤 伸治

二〇一一年四月に始まった岡田美知代の科研も、最終年度が終わろうとしているが、ようやく論文をまとめ、「岡田美知代と「蒲団」——自然主義と少女小説——」という題名で発表しようと考えている。

論文のモチーフは二つあり、一つは、単純な図式におさまりきらない、なんともはつきりしない田山花袋と岡田美知代の関係に対する疑問である。特に、花袋の美知代に対する態度には、真意のつかめない揺れ、弟子である美知代を理不尽に翻弄するように見える曖昧さがあるが、花袋が一時期さかんに作り、そして美知代が読んだであろう「美文」に注目し、文学史における「美文」というジャンルの衰退という観点から、花袋の曖昧さ、揺れについて分析と解釈を試みた。

論文のもう一つのモチーフは、美知代の小説が、師匠である花袋の小説とずいぶん違っていると感じたことにある。花袋の「蒲団」の面白さは、自らの愚かさ醜さを眺め苦笑せざるを得ない自己批評性、自己客観性だと私は解釈しているが、美知代の小説には、そのような自らの愚かさ醜さを眺めるところがあまり見られない。と言うよりも、美知代の小

説には、逆に、自分の「主観」を肯定する自己肯定の方が感じられる。

自他の距離、「主観」と「客観」の距離を越える強い同情心、共感性、そのような自分の資質を疑わず、積極的、能動的に「自分自身に忠実な生活」を求める自己肯定的自意識、こうしたものが美知代の個性ではないか、と私は考えている。こうしたものは、「蒲団」の「自ら自分の心理を客観する」自己客観性、離れた距離から自分の愚かさや醜さを眺める自己批評性とは異質であって、したがって、美知代を田山花袋の弟子、自然主義作家として評価することは、美知代を正當に評価することではないと主張したい。現在見ることでできた範囲では、こうした美知代の個性は、大正期の少女小説に安定して表現されている。

先にも述べたように、美知代が入門したのは、「露骨なる描写」を書いた自然主義評論家としての花袋ではなく、「ふる郷」を書いた「美文的小説家」の花袋だったと思われる。入門してから後、特に出世作「蒲団」以降、「ふる郷」のような作品を通して美知代に見えていた花袋のイメージは、みるみる変貌していったのではないだろうか。その変貌する師の

指導によって、美知代の作品からも「美文」的な装飾は削ぎ落されている。しかし、美知代の作品において、「蒲団」に見られるような自己批評性、自己客観性が、自己肯定性にとって代わって、顕著に表れることはない。

むしろ、美知代の本来的資質という点に限れば、「蒲団」という成功例と花袋の自然主義の指導は、乗り越えることの難しい心理的障害物になったのではないかと考えている。美知代の人生を見渡せば、永代静雄との恋愛以外にも、自分自身をモデルにした小説の素材、題材には困らない、波乱万丈な人生に見える。勝手に想像をめぐらせてみれば、子供のころから親しみ、愛情を抱いている父が家の格式や社会的地位を気にして結婚に反対する、その父と対立する娘としての葛藤、あるいは、そうした父と娘の対立と葛藤を乗り越えて、永代静雄との恋愛結婚を実現していく強い思い、「自分に忠実な生活」（「ある女の手紙」）を求めて永代と離婚、復縁する心の動揺、等々、これらの素材を、教えられた自然主義的観察や客観描写ではなく、自身の実感として描けたならば、どれも面白い小説になった気がする。しかし、百年も後の時点から勝手に想像しているだけであって、実際に、目の前に「蒲団」のような大きな成功例があり、しかも、その成功例を手本として真似することに抵抗感があるとすれば、このような自分自身をモデルにした小説を書くことはきわめて難しいだろう。また、田山花袋の弟子、自然主義作家としての

人脈的評価のつきまとう文壇小説から離れ、花袋が脱ぎ捨てていった「美文」的要素を活用した美文的少女小説を量産するという可能性も考えられるが、装飾過多、情緒過多な文体を捨てることには、美知代にそれほどの抵抗感はなかったようである。

岡田美知代について考えるとき、自然主義を代表する小説の一つである「蒲団」のモデルで、花袋の弟子というイメージが圧倒的で、師弟関係という枠に思考が囚われてしまいがちである。しかし、実際には、美知代は花袋に教えられた通りの小説を完全に忠実に書いていたわけではないし、花袋自身の『小説作法』でも、師から弟子に伝授されるような「型」は否定され、小説を書くには自己の「修練」しかないとされている。つまり、美知代と花袋とは資質的にかなり異なっており、美知代は、「蒲団」という小説と花袋の指導する自然主義を、技術的な部分を取り入れながら、本質的には受け容れなかった、というのが私の仮説である。

（えんどろ しんじ、県立広島大学生命環境学部）

〔付録1〕 岡田（永代）美知代著作リスト （作成・有元伸子、2014年2月末日現在）

	西暦	年月日	出版社名／ 発表雑誌	巻号	題名	発表名	上下 町	備考
<b>I-1 著書(単著)</b>								
1	1917	大正6年11月28日	科外教育叢書 刊行会		花ものがたり	永代美知代		短編集
2	1917	大正6年7月31日	科外教育叢書 刊行会		ケーザル	永代美知代		
3	1918	大正7年2月25日	科外教育叢書 刊行会		世界の三聖	永代美知代		
4	1923	大正12年12月8日	誠文堂		奴隷トム アンクルトムスケピン	永代美知代		翻訳・ストウ夫人原著
5	1924	大正13年5月21日	誠文堂		愛と真実 ジョン・ハリファックス	永代美知代		翻訳・ミュラーック夫人原著
<b>I-2 著書(共著)</b>								
1	1924	大正13年5月8日	春洋社	文芸協会編	熱筆 名著選集	永代美知代		全5篇のうち、美知代執筆は「柳川 春葉のなごめ仲」
<b>I-3 著書(代作?)</b>								
1	1915	大正4年7月12日	中山春秋社		ニコニコ式処世法	牧野元次郎		美知代による代作か? 中山三郎 の証言(「花袋「縁」中の一モデルの 証言」)
<b>II-1 新聞雑誌掲載作品</b>								
1	1902	明治35年5月10日	中学世界	5巻6号	梅	岡田三米		△和歌
2	1902	明治35年6月1日	中学世界	5巻7号	暮春	岡田道代		△和歌
3	1902	明治35年6月1日	中学世界	5巻7号	ほたる	岡田美那子		△和歌
4	1902	明治35年9月1日	中学世界	5巻11号	露	巖谷涙子		△和歌
5	1903	明治36年1月1日	中学世界	6巻1号	小使	岩谷敏雄		△抒情文
6	1906	明治36年1月1日	中学世界	6巻1号	月	岡田道代		△和歌
7	1903	明治36年2月10日	中学世界	6巻2号	梅	岡田紫葦		△和歌
8	1903	明治36年3月1日	中学世界	6巻3号	春の歌	岡田涙		△和歌
9	1903	明治36年3月10日	中学世界	6巻4号	暮春の歌	岡田眞鏡		△和歌
10	1903	明治36年4月10日	中学世界	6巻5号	戦死者の児を見て	岡田眞鏡		△和歌
11	1903	明治36年4月10日	中学世界	6巻5号	渡良瀬の辺りを思ひて	岡田美知代		△和歌
12	1903	明治36年6月20日	中学世界	6巻8号	五月雨	岡田紫野		△和歌
13	1903	明治36年4月10日	中学世界	6巻5号	霞	岡田眞鏡		△和歌
14	1904	明治37年7月10日	中学世界	7巻9号	(無題)いたで負ひし～	岡田美知代		△和歌
	1904	明治37年7月10日	中学世界	7巻9号	友達	岡田美知代		△叙事文 *
15	1904	明治37年8月10日	中学世界	7巻10号	(無題)何となくさびしき思ひ～	岡田萬壽代		△和歌
16	1904	明治37年10月10日	中学世界	7巻13号	(無題)しめやかに平家を～	岡田美知代		△和歌
	1904	明治37年12月10日	中学世界	7巻16号	雑種子	岡田刈萱		△叙事文 *
	1904	明治37年12月10日	中学世界	7巻16号	この死	岡田刈萱		△抒情文 *
17	1905	明治38年2月1日	女子文壇	1巻2号	溝菝	岡田刈萱		△
18	1905	明治38年2月1日	女子文壇	1巻2号	蝴蝶の賦	岡田刈萱		△新体詩
	1905	明治38年3月10日	中学世界	8巻3号	白羽箭	岡田美千代		△叙事文 *
19	1905	明治38年5月10日	中学世界	8巻6号	わが運命	岡田美知代		△
20	1906	明治39年3月15日	文章世界	1巻1号	戦死長家	菜女史		△ 懸賞小説
21	1906	明治39年4月1日	新声	14編4号	雪	美知代		
22	1906	明治39年6月1日	新声	14編6号	長女	岡田美知代		
23	1906	明治39年7月15日	文庫	32巻1号	お須磨	美知代		
24	1906	明治39年8月25日	新潮	5巻2号	文から	美知代		
25	1906	明治39年9月1日	新声	15編3号	下賀茂の森	美知代		
26	1906	明治39年9月25日	実業之横浜	3巻2号	祝辞	美知代		△
27	1906	明治39年9月25日	実業之横浜	3巻2号	屁の色	美知代		△
28	1906	明治39年9月25日	実業之横浜	3巻2号	梅屋の二階	(無署名)		△
29	1906	明治39年10月1日	文藝倶楽部	12巻13号	森の黄昏	美知代		目次は「岡田美知代」。内容は「下 賀茂の森」に同じ
30	1906	明治39年10月25日	実業之横浜	3巻3号	梅屋の二階	美知代		△
31	1906	明治39年11月25日	実業之横浜	3巻4号	梅屋の二階	美知代		△
32	1906	明治39年12月1日	文藝倶楽部	12巻16号	姑ごころ	岡田美知代		
33	1906	明治39年12月15日	新潮	5巻6号	里居	美知代		目次は「美千代」

34	1907	明治40年1月1日	新声	16編1号	家庭	美知代	
35	1907	明治40年1月10日	実業之横浜	3巻6号	不孝児	美知代	△
36	1907	明治40年2月10日	実業之横浜	3巻7号	不孝児	美知代	△
	1907	明治40年2月15日	文章世界	2巻2号	キーチャン	岡田美知代	△*
	1907	明治40年2月15日	文章世界	2巻2号	移転	岡田美知代	△*
37	1907	明治40年2月25日	実業之横浜	3巻8号	狼の権三	美知代	△
38	1907	明治40年3月1日	新声	16編3号	籠行燈	美知代	
39	1907	明治40年3月14日	群馬新聞		その日／＼	刈萱	未確認
	1907	明治40年4月15日	文章世界	2巻5号	でこ市	岡田美知代	△*
40	1907	明治40年4月1日	新声	16編4号	わか草 処女の日記より	岡田美知代	目次は「わか草」
41	1907	明治40年4月13日	山鳩	39	蛇	美知代	目次は「岡田美知代」
42	1907	明治40年5月1日	新声	16編5号	御おとづれ	美知代	
43	1907	明治40年5月20日	新潮	6巻5号	《想苑》狼の権(翻訳小説)ツル ゲーネフ	岡田美知代	目次は「狼の権 岡田美知代」
44	1907	明治40年5月25日	実業之横浜	3巻12号	閑窓漫筆	美知代	目次は「岡田美知代」
45	1907	明治40年5月30日	実業之横浜	4巻1号	耶蘇校長	岡田美知代	
46	1907	明治40年6月10日	山鳩	40	蛇	岡田美知代	
47	1907	明治40年6月15日	文庫	34巻4号	その月その日	岡田美知代	
48	1907	明治40年6月15日	文章世界	2巻7号	一本榎	岡田美知代	目次は「岡田美知代」
49	1907	明治40年7月1日	新声	17編1号	亀さ	岡田美知代	
50	1907	明治40年7月5日	女学世界	7巻10号	机上の花	刈萱女	
51	1907	明治40年7月15日	文章世界	2巻8号	いとこ	岡田美知代	目次は「岡田美知代」
52	1907	明治40年10月1日	新声	17編4号	土手三番町	岡田美知代子	
53	1907	明治40年10月15日	新潮	7巻4号	『蒲団』について	横山よし子	作者名の前に「蒲団のヒロイン」と小書き。目次は「蒲団について」
54	1907	明治40年10月15日	実業之横浜	4巻11号	夢現	岡田美知代	
55	1908	明治41年2月1日	文章世界	3巻2号	紋附	岡田美知代	田山花袋選「会話」地賞
56	1908	明治41年4月15日	女子文壇	4年6号	侮辱	岡田美知代	天賞
57	1908	明治41年4月15日	文章世界	3巻5号	日記の内	岡田美知代	△文叢・佳作
58	1908	明治41年4月15日	文章世界	3巻5号	老嬢	岡田美知代	
59	1908	明治41年10月15日	女子文壇	4年15号	父子	岡田美知代	人賞
60	1909	明治42年1月1日	家庭雑誌	2巻1号	御殿堀	岡田美知代	目次は「小説 御殿堀」
61	1909	明治42年2月1日	家庭雑誌	2巻2号	ふたり	美知代	目次は「小説 ふたり」
62	1909	明治42年5月15日	女子文壇	5年7号	火事	永代美知代	
63	1909	明治42年6月13日～ 8月11日	中央新聞		老嬢の告白	(無署名)	推定・美知代作(または、永代静雄との合作か)。最初3回は「心を傷ましむる」の角書あり
64	1909	明治42年7月1日	少女世界	4巻9号	まあちやんの御看病	美知代	目次は「まあちやん」
65	1909	明治42年9月12日	中央新聞		少女写生 休暇後	みちよ	
66	1909	明治42年10月1日	少女(女子文壇社)	1巻2号	みそ菽	美知代	女子文壇社
67	1909	明治42年10月6日～ 11月17日	中央新聞		女子大学英文科出身 新夫人の 打明話	(無署名)	推定・美知代作
68	1910	明治43年2月1日	少女(女子文壇社)	2巻2号	七つ紋附	まあちゃん記	
69	1910	明治43年6月1日	少女(女子文壇社)	2巻6号	おとぎばなし 雲雀のお祝ひ	美知代	目次は「永代美知代」
70	1910	明治43年8月12～14 日	富山日報		少女ぶんがく 万壽子のお祖母さん	まあちゃん記	一(8/12)・二(8/13)・三(8/14)
71	1910	明治43年8月25～27 日	富山日報		島崎藤村夫人を思ふ	ミセス、エス、 エヌ	上(8/25)・中(8/26)・下(8/27)
72	1910	明治43年8月29日～ 9月1日	富山日報		少女ぶんがく 万壽子のお祖母さん	まあちゃん記	一(8/29)・二(8/31)・二(三の誤り)・9/1)
73	1910	明治43年9月1日	スバル	2年9号	ある女の手紙	永代美知代	1
74	1910	明治43年9月7～8日	富山日報		少女小説 薄志弱行	エヌ夫人	上(9/7)・下(9/8)
75	1910	明治43年10月1日	スバル	2年10号	里子	永代美知代	1
76	1910	明治43年11月16日 ～17日	富山日報		楠緒子女史を追想す	永代美知代	上(11/16)・下(11/17)
77	1910	明治43年11月25日 ～28日	富山日報		蟹江博士未亡人	みちよ女	上(11/25)・中(11/27)・下(11/28)
78	1910	明治43年12月1日	中央公論	25年12号	一銭銅貨	永代美知代	1 「女流作家小説拾篇」の内
79	1910	明治43年12月1日	ホトゝギス	14巻4号	岡澤の家	永代美知代	1
80	1911	明治44年2月1日	少女世界	6巻3号	貰った妹	美知代	

81	1911	明治44年2月1日	少女(女子文壇社)	3巻2号	少女小説 上京!	永代美知代	目次は「少女小説 上京」
82	1911	明治44年2月20日	少女界	10巻3号	少女小説 お形見	永代美知代	
83	1911	明治44年3月5日	少女の友	4巻4号	苦の後	永代美知代	目次は「少女小説 苦の後」
84	1911	明治44年4月1日	ホトヘギス	14巻8号	清のぐるり	永代美知代	
85	1911	明治44年	少女界	10巻8号	かりうど	永代美知代	未確認
86	1912	明治45年1月1日	少女世界	7巻1号	お年玉	永代美知代	3
87	1912	明治45年2月1日	少女世界	7巻3号	花枝さんの雪兎	美知代	3 目次は「永代美知代」
88	1912	明治45年3月1日	少女界 少女(女子文壇社)	11巻3号	少女小説 五重のお菱	永代美知代	※「萬壽子のお祖母さん」(富山日報)に同じ
89	1912	明治45年4月1日	少女世界	4巻4号	揺籃の丘	永代美知代	目次は「揺籃の丘(少女小説)」
90	1912	明治45年4月1日	少女世界	7巻5号	姉様の指環	永代美知代	
91	1912	明治45年7月1日	少女世界	7巻9号	暗い叔母さん	永代美知代	目次は「暗いをばさん」
92	1912	大正元年9月1日	家庭パック	1巻5号	虫干	永代美知代	
93	1912	大正元年9月1日	少女世界	7巻12号	帰校前	永代美知代	
94	1912	大正元年11月1日	少女世界	7巻15号	赤い柿	永代美知代	目次は「少女小品 赤い柿」
95	1912	大正元年12月1日	少女世界	7巻16号	罰金ごっこ	永代美知代	
96	1912	大正元年12月1日	家庭パック	1巻11号	でべちゃんと赤ん坊	永代美知代	
97	1913	大正2年1月1日	少女世界	8巻1号	日本文学講義 落窪物語	永代美知代	2 目次は「おちくぼ物語」
98	1913	大正2年2月1日	少女世界	8巻3号	日本文学講義 落窪物語(下)	永代美知代	2 目次は「おちくぼ物語」
99	1913	大正2年3月1日	少女世界	8巻4号	英国の子供小説 オリヴァー・ツイスト一	永代美知代	目次は「英国の子供小説」
100	1913	大正2年3月15日	婦人評論	2巻6号	小説 洪水の後	永代美知代	2
101	1913	大正2年4月1日	少女(時事新報社)	4号	少女小説 大火の後	永代美知代	3
102	1913	大正2年4月1日	少女画報	2年5号	英文のお手紙	永代美知代	3 目次は「少女小説 英文のお手紙」
103	1913	大正2年4月1日	少女世界	8巻5号	英国の子供小説 オリバー・ツイスト二	永代美知代	2 目次は「オリバー・ツイスト」
104	1913	大正2年5月1日	少女世界	8巻6号	英国の子供小説 オリバー・ツイスト(第三)	永代美知代	2 目次は「オリバー・ツイスト」
105	1913	大正2年6月1日	少女世界	8巻7号	英国の子供小説 オリバー・ツイスト(第四)	永代美知代	2 目次は「オリバー・ツイスト」
106	1913	大正2年6月1日	少女画報	2年8号	少女小説 郷里	永代美知代	3 目次は、永代みちよ「少女小説 郷里へ」
107	1913	大正2年6月1日	婦人評論	2巻11号	小説 同窓の人々	永代美知代	3 目次は「永代美千代」
108	1913	大正2年7月1日	少女世界	8巻8号	英国の子供小説 オリバー・ツイスト(第四)	永代美知代	2 本来は「オリバー・ツイスト」(五)
109	1913	大正2年8月1日	少女画報	2年10号	少女小説 サマー、ハウス	永代美知代	3
110	1913	大正2年8月1日	婦人評論	2巻15号	小説 縁談	永代美知代	1 大5『女子の友』に同一作品
111	1913	大正2年9月1日	淑女画報	2巻9号	花嫁の型	永代美知代	目次は「永代美知代」
112	1913	大正2年9月1日	少女世界	8巻10号	福富草子	永代美知代	2 目次は「福富草子の話」
113	1913	大正2年9月15日	婦人評論	2巻18号	小説 冷い顔	永代美知代	2 目次は「永代美千代」
114	1913	大正2年9月	現代	4巻9号	(不明)	永代美知代	未確認 中興館書店
115	1913	大正2年10月10日	少女世界	8巻12号	国なまり	永代美知代	1 目次は「お国なまり」
116	1913	大正2年10月10日	少女画報	2年13号	少女小説 窓の下	永代美知代	3
117	1913	大正2年11月15日	婦人評論	2巻22号	小説 出戻りさん	永代美知代	2
118	1913	大正2年12月1日	少女世界	8巻14号	その日その夜	永代美知代	3
119	1914	大正3年1月1日	少女世界	9巻1号	この頃の少女の使ふ新しい言葉	永代美知代	目次は「少女の新用語」
120	1914	大正3年2月1日	少女世界	9巻2号	現代少女の新用語	(無署名)	目次は、永代美知代「少女の新用語」
121	1914	大正3年2月1日	婦人評論	3巻3号	小説 郷里のをんな	永代美知代	1
122	1914	大正3年2月1日	ニコニコ	37	新カーテン、レクチャー	永代美知代	
123	1914	大正3年3月1日	ニコニコ	38	英仏女優人気競べ	永代美知代	
124	1914	大正3年3月1日	淑女画報	3巻3号	女権史巻頭の二女性	永代美知代	
125	1914	大正3年3月1日	少女世界	9巻3号	現代少女の新用語	(無署名)	目次は「少女新用語」
126	1914	大正3年3月1日	少女世界	9巻3号	少女小説 生みの母	永代美知代	3
127	1914	大正3年4月1日	少女世界	9巻4号	少女小説 生みの母(下)	永代美知代	目次は「少女小説 生みの母」
128	1914	大正3年5月1日	淑女画報	3巻5号	野菜ばかりの西洋惣菜料理十五種一(手軽で、経済的で、美味で、誰にでも出来る)	永代美知代	目次は「野菜ばかりの西洋料理十五種」
129	1914	大正3年5月1日	少女世界	9巻5号	現代少女の新用語	永代美知代	目次は「少女の新用語」

130	1914	大正3年6月1日	少女世界	9巻6号	現代少女の新用語	永代美知代		目次は「少女の新用語」
131	1914	大正3年6月1日	淑女画報	3巻7号	短い恋と長い恋の新レコード	永代美知代		
132	1914	大正3年6月1日	新小説	19年6巻	蛙鳴く声	永代美知代	2	本人が「蛙鳴く頃」と修正書込
133	1914	大正3年6月1日	ニコニコ	41	七人目の理想の夫 四人目の今の夫を離婚の訴訟中	永代美知代		目次は「四人目の今の夫を離婚の訴訟中」
134	1914	大正3年7月1日	ニコニコ	42	富か芸術か\$35,000,000か画板か	永代美知代		目次は「富か芸術か\$35,000,000か平カンバス乎」
135	1914	大正3年8月1日	少女世界	9巻8号	地獄の御飯のたべられる 湯の宿から	永代美知代		目次は「湯の宿より」
136	1914	大正3年9月1日	少女世界	9巻9号	泥棒に一冊の書物を与へた寄宿舎の少女	永代美知代		目次は「泥棒に書物を与へた寄宿舎」
137	1914	大正3年9月1日	ニコニコ	44	魔王の恋の日記	永代美知代	2	
138	1914	大正3年9月or 10月	たかね		ドウデエ盲皇帝	(不明)		未確認、「早稲田文学」第二次、108号、大3.11.1の葉報「新聞雑誌文学一覧」に記載
139	1914	大正3年10月1日	淑女画報	3巻11号	二、賑かなセルビアの結婚 =何事も父母の意志次第で動く青年男女	永代美知代		目次は「セルビアの結婚」
140	1914	大正3年11月1日	少女世界	9巻11号	貧賤の身から発奮して女学校の教師に!	永代美知代		
141	1915	大正4年1月1日	少女世界	10巻1号	十六で表彰された親孝行な子守女	永代美知代		目次は「十六歳で表彰された子守女」
142	1915	大正4年2月1日	ニコニコ	49	莞爾々々のあの家此家	永代みち代	3	
143	1915	大正4年3月1日	少女世界	10巻3号	火炎に包まれゆく野呂さん	永代美知代	3	目次は「火炎に包まれ行く少女」
144	1915	大正4年3月1日	ニコニコ	50	おさつで買取した『女客』	永代美知代	2	
145	1915	大正4年4月1日	少女世界	10巻4号	少女小説 ゆく水	美知代		目次は「少女小説 ゆく水」美知代
146	1915	大正4年5月1日	少女世界	10巻5号	行く水 二	美知代女		目次は「少女小説 ゆく水」
147	1915	大正4年5月1日	ニコニコ	52	不思議な女達	美知代	2	
148	1915	大正4年6月1日	少女世界	10巻6号	行く水 三	美知代女	3	目次は「少女小説 ゆく水」
149	1915	大正4年7月1日	少女世界	10巻7号	行く水(四)	美知代女	3	目次は「少女小説 ゆく水」美知代女
150	1915	大正4年8月1日	少女世界	10巻8号	行く水(五)	永代美知代		目次は「少女小説 ゆく水」
151	1915	大正4年8月1日	ニコニコ	55	廿歳で眼の開いた令嬢の初めて見た世界	永代美知代		
152	1915	大正4年9月1日	ニコニコ	56	顔から生れた十億弗	永代美知代		
153	1915	大正4年9月1日	新潮	23巻3号	『蒲団』、『縁』及び私	永代美知代	1	目次は「『蒲団』、『縁』及び私」
154	1915	大正4年10月1日	女の世界	1巻6号	小説 二人の家	永代美知代	1	
155	1915	大正4年10月15日	女の世界	1巻7号	平氏の恋と源氏の恋	永代美知代		定期増刊 恋物語
156	1915	大正4年12月	希望		秋立つころ	永代美知代	1	未確認
157	1916	大正5年1月	希望		秋立つ頃	永代美知代	1	未確認、「前号の続き」
158	1916	大正5年1月	女子の友		縁談			未確認、大2『婦人評論』にも掲載
159	1916	大正5年1月1日	女の世界	2巻1号	当世浮世風呂女湯の巻	永代美知代		
160	1916	大正5年1月1日	ニコニコ	60	今様閨語	永代美知代	3	
161	1916	大正5年2月1日	ニコニコ	61	妻より未婚のクラスメートへ	永代美知代		
162	1916	大正5年2月1日	少女画報	5年2号	姉より妹にー東京の印象ー	永代美知代	3	
163	1916	大正5年3月1日	少女世界	11巻3号	梅日和	永代美知代		目次は「少女小説 梅日和」
164	1916	大正5年5月26日	婦女新聞	836	愛の欠乏は婦人をヒステリイにする	永代みち代		目次は「愛の欠乏とヒステリイ」
165	1916	大正5年6月1日	幼年世界	6巻6号	チビ太郎の冒険	永代美知代		目次は「永代美智代 チビ太郎(お加嚙)」
166	1916	大正5年6月16日	婦女新聞	839	短篇小説 母一人子一人	永代美知代		(上)
167	1916	大正5年6月23日	婦女新聞	840	短篇小説 母一人子一人	永代美知代		(下)
168	1916	大正5年7月1日	少女世界	11巻7号	長い指 短い指	永代美知代		目次は「少女小説 長い指 短い指」
169	1916	大正5年7月1日	ニコニコ	66	夏と家庭	永代美知代	2	
170	1916	大正5年7月14日	婦女新聞	843	短編小説 電報	永代美知代		(上)
171	1916	大正5年7月21日	婦女新聞	844	短編小説 電報	永代美知代		(下)
172	1916	大正5年8月11日	婦女新聞	847	少女小説 帰省の日	永代美知代		目次は「帰省の日(少女小説)」
173	1916	大正5年9月1日	少女世界	11巻9号	私の最も感動した事 仲間はずれの少女	永代美知代		目次は「私の最も感動したこと」

174	1916	大正5年10月1日	少女世界	11巻10号	歴史物語 信行の侍女(上)	永代美知代	2	
175	1916	大正5年10月20日	婦女新聞	857	小説 秋晴の日(上)	永代美知代		△
176	1916	大正5年10月27日	婦女新聞	858	小説 秋晴の日(下)	永代美知代		目次は「秋晴れの日(小説)」
177	1916	大正5年11月1日	少女世界	11巻11号	歴史物語 信行の侍女(下)	永代美知代		
178	1916	大正5年12月1日	少年倶楽部	3巻12号	大岡裁判 皮剥獄門	永代美知代	2	
179	1917	大正6年3月1日	ニコニコ	74	仲人になつて	永代美知代		
180	1917	大正6年3月1日	少女世界	12巻3号	雛祭を待ちつゝ	永代美知代		
181	1917	大正6年4月1日	ニコニコ	75	素人書画会を観る	永代美知代	2	目次は「素人書画会を見る」
182	1917	大正6年6月1日	ニコニコ	77	愛と鼻	永代美知代	2	
183	1917	大正6年9月7日	婦女新聞	903	小品 理想の美人	永代美千代		上
184	1917	大正6年9月14日	婦女新聞	904	小品 理想の美人	永代美知代		下、目次は「理想の美人」
185	1917	大正6年11月1日	少女世界	12巻12号	冒険奇談 少女島(一)	永代美知代		目次は「冒険小説 少女島」
186	1917	大正6年12月1日	少女世界	12巻13号	冒険奇談 少女島(二)	永代美知代		目次は「冒険奇談 少女島」
187	1918	大正7年1月1日	少女世界	13巻1号	冒険奇談 少女島(三)	永代美知代	3	目次は「冒険奇談 少女島」
188	1918	大正7年2月1日	少女世界	13巻2号	冒険奇談 少女島(四)	永代美知代	3	目次は「冒険奇談 少女島」
189	1918	大正7年3月1日	少女世界	13巻3号	冒険奇談 少女島(五)	永代美知代		目次は「冒険奇談 少女島」
190	1918	大正7年8月1日	家庭及学校	3巻2号	趣味の旅行	永代美知代		末尾に(以下次号)
191	1918	大正7年10月1日	少女世界	13巻10号	山の物語 角のある人 一	永代美知代		目次は「角のある人」
192	1918	大正7年11月1日	少女世界	13巻11号	山の物語 角のある人 二	永代美知代		
193	1918	大正7年12月1日	少女世界	13巻12号	山の物語 角のある人(三)	永代美知代	3	目次は「角のある人」
194	1919	大正8年5月1日	新家庭	4巻5号	家庭童話 青い鳥の巣	永代美智子	3	
195	1919	大正8年6月1日	新家庭	4巻6号	家庭童話 三熊さん	永代美知代		
196	1919	大正8年9月1日	夢の世界	2巻9号	蛇物語	永代美知代	2	
197	1919	大正8年10月1日	新家庭	4巻10号	三つのお話	永代美知代		目次は「家庭童話 三つのお話」「永代みちよ」
198	1919	大正8年11月1日	ニコニコ	101	寄せ切れ買ひに……	永代美知代	2	
199	1920	大正9年2月1日	少女世界	15巻2号	美枝ちゃん的眼	永代美知代		
200	1920	大正9年3月1日	新家庭	5巻3号	西洋お伽譚 春の小人	永代美知子		目次は「西洋童話 春の小人」「永代美知代」
201	1920	大正9年4月1日	新家庭	5巻4号	怪訝なローレンの瞳	永代美知代	3	目次は「怪訝なローレンの瞳」。前号「春の小人」の続き
202	1921	大正10年3月1日	婦人倶楽部	2巻3号	(初めて母となりし時の感想)	永代美知代		アンケート
203	1921	大正10年4月17日	時事漫画	10	春子さんと海狸	永代美知代		時事新報社「日曜画報」
204	1921	大正10年6月1日	女の世界	7巻6号	良人が若し不品行をしたなら… …?	永代美知代		男女品行問題号、肩書は「新聞及新聞記者主幹永代静雄氏夫人」
205	1921	大正10年6月1日	少女世界	16巻6号	(二)クリームパン	永代美知代		「たのしい遠足の日」の総題で、三人の分担執筆
206	1921	大正10年7月17日	時事漫画	23	啄木鳥と幸男さん	永代美知代		
207	1921	大正10年8月1日	女の世界	7巻8号	愛無き者に依つて醸せる悲劇	永代美知代		浜田栄子問題真相号、目次は「永代美智代」
208	1922	大正11年4月1日	令女界	1巻1号	童話 緋桃の精	美知代		
209	1922	大正11年5月1日	令女界	1巻2号	少女小説 孤独	美知代		
210	1923	大正12年4月1日	婦人公論	8年4号	われらは飢ゑてゐる(今日我等女性が一番何を痛切に要求するか)	永代美知代		
211	1923	大正12年8月12日	時事漫画	128	笑ひの室	永代美知代		
212	1924	大正13年5月1日	女性	5巻5号	棄権	永代美知代		「総選挙に誰れを選ぶか?」の解答者24名の一人
213	1924	大正13年7月	復習と受験		童話 裁判の鐘	永代美知代	3	未確認
214	1924	大正13年9月1日	少女世界	19巻9号	少女物語 誕生日の贈物	永代美知代	3	
215	1958	昭和33年7月1日	婦人朝日	13巻7号	手記 花袋の「蒲団」と私	永代美知代		『日本文学研究資料叢書 自然主義』に再録
216	1958	昭和33年10月1日	みどり	1巻5号	手記 私は「蒲団」のモデルだった	永代美知代		(學燈社)
<b>II-2 新聞雑誌掲載作品(掲載誌・時期未詳)</b>								
1			女学の友		東京で(一)	永代美知代	1	女学文壇
2			女学の友		東京で(二)	永代美知代	1	
3			女学の友		東京で(三)	永代美知代	1	
4			女学の友		東京で(四)	永代美知代	1	
5			女学の友		東京で(五)	永代美知代	1	
6			女学の友		東京で(六)	永代美知代	1	
7			女学の友		東京で(七)	永代美知代	1	

8		女学の友	東京で(八)	永代美知代	1
9		女学の友	東京で(九)	永代美知代	1
10		女学の友	東京で(十)	永代美知代	1
11		女学の友	三人姉妹(一)	永代美知子	1
12		女学の友	三人姉妹(二)	永代美知代	1
13		女学の友	三人姉妹(三)	永代美知代	1
14		女学の友	三人姉妹(四)	永代美知代	1
15		女学の友	三人姉妹(五)	永代美知代	1
16		女学の友	三人姉妹(六)	永代美知代	1
17		女学の友	三人姉妹(七)	永代美知代	1
18		女学の友	三人姉妹(八)	永代美知代	1
19		女学の友	三人姉妹(九)	永代美知代	1
21			アルフォンソ・ドウデー	永代美知代	2
22			少女スケッチ	永代美知代	2
23			三人の家		

### Ⅲ 生前未発表原稿(執筆時期未詳)

1	明治40年9月執筆		小夜子		花袋文学館蔵、『『蒲団』をめぐる書簡集』に翻刻
2			愛憎	50枚	花袋文学館蔵、「ある女の手紙」(『スバル』明43.9)の改作
3			野獣	20枚	上下資料館蔵、「一銭銅貨」(『中央公論』明43.12)の改作
4			あの頃の人たち	20枚	上下資料館・花袋文学館の2種類、「同窓の人々」(『婦人評論』大2.6)の改作
5			猫の兎同様	25枚	花袋文学館蔵、「出戻りさん」(『婦人評論』大2.11)の改作、翻刻 宮内俊介『花袋記念館研究紀要』11
6			嫁姑	20枚	上下資料館蔵、「二人の家」(『女の世界』大4.10)の改作(2種類)
7			女学生の恋物語	30枚	花袋文学館蔵、「秋立つころ」(『希望』大4.12～5.1)の改作、翻刻 宮内俊介『花袋記念館研究紀要』12
8			はしがき	2枚	上下資料館蔵
9			瑞穂とその周辺	43枚	花袋文学館蔵
10			デッサンショ	100枚	上下資料館蔵
11	昭和33年執筆		国木田独歩のおのぶさん	50枚	上下資料館蔵、翻刻 有元伸子『内海文化研究紀要』40
12	昭和34年執筆		云い得ぬ秘密	25枚	上下資料館蔵、翻刻 ①宮内俊介『花袋記念館研究紀要』10 ②原博巳『岡田美知代の素顔』

(注)

(1)旧字体は新字体に改めた。

(2)「上下町」欄は、上下歴史文化資料館編『岡田(永代)美知代作品集』①～③に掲載された作品で、数字は掲載巻。

(3)「備考」欄……「△」は、目次に作品名・作家名が掲載されていない作品。

「\*」は、本文が掲載されず、講評によって雑誌に投稿した事実のみが知られるもの。

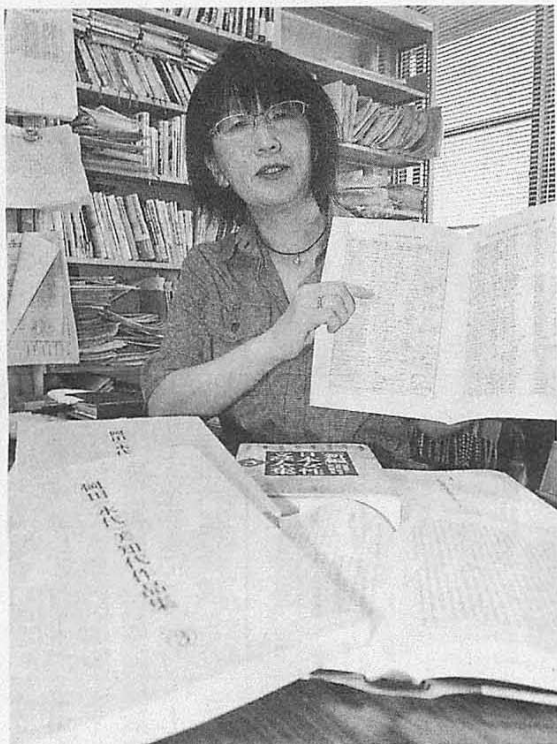
「花袋文学館」は館林市田山花袋記念文学館所蔵、「上下資料館」は広島県府中市上下歴史文学館所蔵

(参考文献)

- ・上下歴史文化資料館編『岡田(永代)美知代作品集』①②③(私家版)
- ・守本祐子「岡田美知代投稿作品」「岡田美知代の作品」(私家版)
- ・清田啓子「資料紹介 花袋「縁」中の一モデルの証言」『駒沢短大国文』10、1980年3月
- ・小林一郎「年譜篇」『田山花袋研究一年譜・索引篇』桜楓社、1984年
- ・『田山花袋記念館研究叢書第二巻 『蒲団』をめぐる書簡集』館林市、1993年
- ・原博巳「岡田美知代の素顔－田山花袋「蒲団」のモデル」『梶葉』VI、1998年7月
- ・原博巳「第7章第二節 晩年を庄原で過ごした女流文学者岡田美知代」『庄原市の歴史 通史編』庄原市、2005年
- ・大西小生『アリス物語』『黒姫物語』とその周辺』ネガ！スタジオ、2007年
- ※大西氏からは、私信でもご教示いただいた。
- ・宇田川昭子「〔資料ノート〕岡田美知代の知られざる同人活動」『花袋研究学会々誌』26、2008年3月
- ・小谷野敦「岡田美知代と花袋「蒲団」について」『日本研究』38、2008年9月
- ・吉川豊子「永代美知代」・守本祐子「略年譜」『〔新編〕日本女性文学全集 第三巻』菁柿堂、2011年



# 奔放な女 自らに重ね



岡田(永代)美知代の研究を進める有元教授(東広島市の広島大で)

## 「蒲団」モデル岡田美知代

### 未発表小説を廣大教授翻刻

広島大学院文学研究科の有元伸子教授(52)は、田山花袋の小説「蒲団」のヒロインのモデルとされる府中市上下町出身の作家・岡田(永代)美知代(1885～1968)の未発表小説「国木田独歩のおのぶさん」を翻刻した。美知代が1958年に手記「私は『蒲団』のモデルだった」を発表する直前の作品で、有元教授は「うわさに翻弄された同じ境遇の女性を描くことで、自らの心情を吐露する緩衝材にしたのではないかと分析している。

(河部啓介)

### 「地方にも優れた女流作家」

「おのぶさん」は、文豪・国木田独歩の最初の妻で、有島武郎の小説「或る女」のモデルとされる佐々城信子。原稿用紙50枚の短編で、美知代は雑誌「婦人公論」に送ったが、掲載されなかった。別の原稿の裏に書かれた下書き原稿が市上下歴史文化資料館に残り、有元教授が調べていた。全節「おのぶさん」という呼び掛けから始まるスタイルが特徴的で、明治時代の女学生たちの寄宿舎生活や、うわさ話がエスカレートしていく過程などが生き生きと描かれている。

信子は「或る女」で、十歳代で作家と恋愛し結婚、破綻した奔放な女・早月葉子として描かれた。「蒲団」のヒロインとして好奇の目で見られた美知代が、自分と正直で情熱的に生きた女として興味や共感を寄せた様子(河部啓介)がうかがえる。作品研究の過程で、信子が美知代と同時期に神戸女学院(当時神戸市)に在籍していたことも分かり、有元教授は「共に後年、男性作家に作品のモデルにされた2人がすれ違ふ、巡り合わせに妙味がある」と話す。美知代と親しかった独歩が、過去の恋愛について繰り返し語っていた事実も読み取れ、「独歩研究にとっても新しい見方を与えてくれる」とする。

有元教授は今後、同館で活動する「岡田美知代研究会」と連携しながら、未発表作品の翻刻を進めるといふ。「明治の女流作家は、樋口一葉と与謝野晶子だけではない。地方にも優れた作家がいることを知ってほしい」と話す。今回の成果は論文にまとめ、広島大ホームペーの「学術情報リポトリ」に近く掲載予定。作品の問い合わせは上下歴史文化資料館(0847・62・3999)。

〔付録2〕 本研究についての報道

新刊 月刊

(第3種郵便物認可)

# 花袋「蒲団」に弟子の発想?

## 広島大・有元教授が論文

明治の文豪・田山花袋の小説「蒲団」のモデルで府中市上下町出身の作家・岡田美知代(1880-1968年)を研究している広島大学大学院文学研究科の有元伸子教授は、美知代の未発表小説が「蒲団」に影響を及ぼした可能性があるとする論文をまとめた。花袋の研究者も「斬新な発想で興味深い」と関心を寄せている。

(河部啓介)

「蒲団」では、小説家志望の美知代がモデルとされるヒロインが、恋愛事件を機に帰郷させられる。花袋は「蒲団」内で「すぐれた作品一つ得ず、かうして田舎に帰る運命かと思ふと、堪らなく悲しくならずには居られまい」と手厳しい。近代以降の女性文学の研究



花袋の「蒲団」をめぐる論文を著した有元教授(広島市中区)

## モデルの未発表作に似る

などに発表したという調査結果を示し、帰郷後こそ、創作活動が活発になったと述べている。

また、有元教授は、美知代が07年に自分の恋愛を題材にしたと推測される小説「青春譜」を書き、その半年後、花袋がよく似た題材で「蒲団」を発表したと指摘。残っている手紙などによると、花袋は「非常に主観的でそして感情的」と非難し「此物語はまだ書くには早いでせう」と「青春譜」の発表を止めていた経緯もあった。

有元教授は「花袋は弟子の作品にヒントを得て執筆したのではないか。美知代の創造性は師匠を触発するほどだったのだろう」と分析する。

「花袋研究会」会員の宇田川昭子さん(68)(東京都)は「美知代観を覆す新しい視点だ」と評価。花袋を研究する奈良大文学部の光石亜由美准教授(日本近代文学)は「『蒲団』成立の過程に新たな光を投げかけている。当時の女性作家が抱える創作の困難さを知るきっかけにもなる」とする。

広島大大学院文学研究科教授

有元 伸子さん(53)

＝広島市東区

# 備録

田山花袋の「蒲団」に登場する女性のモデルとなった府中市上下町出身の文学者岡田美知代(1885～1968年)。「彼女は自分の恋愛を題材に小説を書こうとしていたのを師に止められ、そのアイデアを奪われたのでは」。美知代の



「岡田美知代は蒲団のモデルだけの存在だったのか」と疑問を投げ掛ける有元教授

## 女性文学者真の姿に光

生家を改装した市上下下の花袋が、おろおろとカ月後に花袋は美知代を歴史文化資料館の開館わびている様子が見え10周年記念講演で話している」という。

「どうか堪忍してくたさい。いかようなお詫びにもしたいと手紙を出したおろおろ。おろかなる師よの対し、花袋は「まだ早すぎる」と執筆を差し控えた手紙について「天止めた点を指摘。その7

ありもと・のぶこ 岡山市中区出身。広島大大学院文学研究科博士課程単位取得退学。金城学院大助教授、鈴峯女子短大助教授などを経て2004年から現職。著書に「三島由紀夫物語る力とジェンダー」など。専門は日本近現代文学。

美知代の研究に、3年前から取り組む。当初確認されていた作品は約100点だったが、少なくとも著書が5点、雑誌や新聞に掲載された作品が216点、未発表原稿も10点あることが分かった。「美知代の作品が世に出ていけば、文学史に残る作品になっていたかもしれない」

(筒井晴信)

JSPS科学研究費報告書(23520227)

基盤研究(C)平成23～25年度(二〇二一～二〇二三年度)

広島的女性作家・岡田(永代)美知代に関する総合的研究

研究代表者 有元伸子(広島大学)

研究分担者 遠藤伸治(県立広島大学)

瀬崎圭二(広島大学)

二〇二四年三月三十一日 発行

編集・発行 有元伸子

東広島市鏡山一―二―三

広島大学文学研究科

[narimoto@hiroshima-u.ac.jp](mailto:narimoto@hiroshima-u.ac.jp)

登録

広島大学学術情報リポジトリ(HiR)

広島大学図書館学術情報企画主担当

<http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/portal/>